日蓮聖人の仏種論について

渡 辺 宝 陽

日蓮聖人の宗教は、末法衆生の救済を法華經によつて確立するところにその眼目があつた。そこで、仏教の受けとり方、法華經の受けとり方にも、釈尊在世の受けとり方と、釈尊入滅後の受けとり方とがあることを明確にしなければ、救済の現実は確かめられにくいと、日蓮聖人は主張された。

ここにかかげた「日蓮聖人の仏種論」とは、一般的に言え、仏性論と関接するものであるが、それを何故にあえて「仏種」として論じなければならなかつたのか、「仏種」とはいかようにとらえられるのが問題となつてくる。

一 一念三千仏種と三益論の転換

まず、日蓮聖人の仏種論が集中的に明らかにされるのは、『開目抄』『観心本尊抄』であることを確認せねばならない。後に述べるように、それ以前には日蓮聖人の仏種論は明確にされていなかったのである。

周知の通り、『開目抄』の眼目は一念三千の法門を明らか

にすることにある。

一念三千の法門は但法華經の本門寿命量品の文の底にしづめたり。竜樹・天親知て、しかもいまだひろいいださず。但我が天台智者のみこれをいだけり。一念三千は十界互具よりことはじまれり。

……（定遺五三九頁）

迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一を脱たり。しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るににたり。本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顯す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真（ノ）十界互具・百界千如・一念三千なるべし。（定遺五五二頁）

これらの文章は先学の注目し、強調している点であり、それと仏種論との関わりが論じられているところであるが、そ

こにいう「種」の概念は必ずしも一念三千論との関係を明確にされていない。そこでふたたび『開目抄』を見ると、日蓮聖人は法華經の流通史をふり返りながら「法華經の種に依て天親菩薩種子無上を立たり」（五七九頁）といい、つづいて飛躍的に「天台の一念三千これなり」という。さらに、「華嚴經乃至諸大乘經・大日經等の諸尊の種子、皆一念三千なり。天台智者大師一人此法門を得給えり」といい、諸宗の依經にはこのことを明らかにしていないにもかかわらず、諸宗の学者は天台の一念三千を勝手に取り入れて、もともとその法門があつたのだと主張しているとして、それを批難している。

『開目抄』の文章の流れを見れば直ちに気づくように、日蓮聖人は結論の証明を主眼とするため、その途上の論理的精緻さを必ずしも求めない。そのような見方からすると、一念三千を仏種としてとらえらるゝとらえ方を詳細に論じてはいないが、その基本に、天親以来の「種子無上」のとらえ方があると考えられる。

それを継承したのが伝教大師であるが、日蓮聖人は伝教の『法華秀句』の「他宗所依の經は一分仏母の義有りと雖も、然れども但だ愛のみ有つて嚴の義を闕く。天台法華宗は嚴愛の義を具す。一切の賢聖、学無学、及び菩薩心を発せる者の父なり」の文を重視する（定遺五七九頁）。そして、「真言・華嚴等の經には種熟脱の三義、名字すら猶なし。何に況や

其義をや。華嚴・真言等の一生初地の即身成仏等は、經は權經にして過去をかくせり。種をしらざる脱なれば、超高が位ののぼり、道鏡が王位に居せんとせしがごとし」と、伝教大師のみが種熟脱の三益論にもとづく仏教觀を認識しているものとした。ただし、日蓮聖人は『本尊抄』に明らかにするよう、このような三益論を釈尊在世の延長としての正法・像法に適應した仏教觀であるとし、一転して、末法においては、下種益の強調をするのであつて、その転換の論理は日蓮教學においてしばしば論じられるとはいへ、再度、嚴密に論及することが必要であらう。

この辺が、前述した通り、『開目抄』において「一念三千の法門は但法華經の本門寿量品の文の底にしづめたり」という表現となるものであるが、少なくとも仏種論の基幹という点からいえば、詳細な論の裏づけはなされなかつたといつてよいであらう（日蓮聖人の立場からは、元來、そのようなことは不必要であるのかも知れないが）。ただ、「但、天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ」（五三九頁）「此經計（り）一念三千の玉をいだけり」「此經は愚人も仏因を種（ゆ）べし」「自然に仏界にいたるべし」等と述べるのみである。

『開目抄』の翌年著わされた『本尊抄』は、觀心段・本尊段・弘通段の三段において、『開目抄』に述べられた法華經の救済を更に嚴密に明らかにしようとしたものであつて、末

法にあつては下種益のみが有効であるとの論が明確にされている。すなわち、『観心本尊抄』において、

普賢經に云く、此大乘經典は諸仏の宝蔵十方三世の諸仏の眼目なり。乃至、三世の諸の如来を出生する種なり。乃至、汝、大乘を行じて仏種を断ぜざらん等云云。(原漢文以下同じ)

等の經文を集約し、

詮ずるところは、一念三千の仏種に非ざれば、有情の成仏・木画

二像の本尊は有名無実なり。

と論じて、具足の論を述べ

釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等、此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与へたまふ。：

……妙覺の釈尊は我等が血肉なり。因果の功徳は骨髓に非ずや。

(定遺七一頁)

と結示される。

このような受持成仏論のもとに、種熟脱三益論の轉換があることが明らかにされる。すなわち、

本門をもつてこれを論ずれば、一向に末法の初を以て正機となす。

所謂、一往これを見る時は久種をもつて下種となし、

大通・前四味・迹門を熟と為し、

本門に至つて等妙に登らしむ。

と、一往、種熟脱三益論を明らかにし、ついで、

日蓮聖人の仏種論について(渡 辺)

再往これを見れば、迹門には似ず。本門は序・正・流通俱に末法の始を以て詮となす。

といい、

在世の本門と末法の初は一同に純円也。

但し、彼は脱、此は種なり

彼は一品二半、此は題目の五字なり

というのである。このように、日蓮聖人は結論的に三益の完成に立つ脱益でなく、それを超克した末法下種に立たねばならぬことを結示される。

このような轉換の論理については、諸所に達意的に述べられているのであるが、その論理の確認については、更に詳しく追求しなければならぬであろう。その点については別の稿に期したい。

二 就類種・相對種の問題

昨年この学会で発表した通り、日蓮聖人は身延において『始聞仏乘義』をしたため、そのなかで、就類種・相對種を論じた。天台大師の『摩訶止観』に説かれるこの論によつて、末法謗法の機の救済を明らかにしたのである。この就類種・相對種の論は、きわめて結論的に説かれる一念三千仏種の論に對して、むしろその基底にある論となるものであろうが、実はこのことはほとんど日蓮聖人遺文に述べられていな

いにもかかわらず、初期に著わされた『守護国家論』に、既に述べられていることは注目されてよい。すなわち、

総じて天台妙楽の三大部の本末の意には法華経は諸経に漏れたる愚者・女人・常没の闍提等を撰したまふ。人天・四悪を以て法華経の機と定む。種類・相対を以て過去の善悪を収む。（原漢文、一一一—一二頁）

とあるのは、そのような趣旨を掘り起すのが日蓮聖人の宗教であることを明らかにする意図を示すものといえようし、安藤俊雄博士のいわゆる敵対的相即の論理に根ざして、釈尊在世の延長の仏教に対する、釈尊滅後末法五濁の救済仏教開示への転換が、既に日蓮聖人初期の教学から示されていることを物語るものといえよう。そして、それを具体的に述べて、

仏の入滅は既に二千余年を経たり。然りと雖も、法華経を信ずる者の許に仏の音声留めて、時々刻々、念念に、我が死せざる由を聞かしむるなり。心に一念三千を觀ぜざれども、徧く十方世界を照す者也。此等の徳は偏に、法華経を行ずる者に備はれる也。（一一一頁）

といっていることは、たとえ「一念三千仏種」の語として成熟していないとしても、内実的に、『開目抄』『観心本尊抄』に示される「一念三千仏種」の構造を指し示すものである。

さて、こうした叙述から遡つてみると、『守護国家論』の

冒頭に、法然上人を批判して、

実経を録して権経に入れ、法華真言の直道を閉て浄土三部の隘路を開く。亦、浄土の三部の義にも順ぜずして権経の謗法を成し：と述べた後、

永く四聖の種を断じて阿鼻の底に沈むべき僻見也。（八九頁）と述べる、その「四聖の種を断じて」という表現に注意を引かれるのである。

これを、前述の「法華経の種に依て天親菩薩は種子無上を立てたり」の文例に照らすと、そこという種とは、「一切衆生悉有仏性」というような意味での「性」乃至「仏性」ではない。仏種とは仏陀からのはたらきかけであり、「四聖の種」とは、仏・菩薩・縁覚・声聞のそれぞれを完成する根源的契機をなすものでなければならぬ。

これと一見矛盾するようであるが、『開目抄』等にしばしば語られる「二乗焦種」「二乗蘇生」とは、二乗が声聞・縁覚の自己完成を樂うために、肝心な「仏種」を失つてしまつたことへの批判であり、それに対する救済である。「種」ということが譬喩的にとらえられると、「種」のとらえ方が植物の成長と成熟とに類似した考え方に移項されて理解されてしまふ危険がないではないが、そうではなくて「仏種」とは、仏陀からの救済へのはたらきかけが、根源的なものの衆生自身への内在となる根源的契機となるものと理解すべきである。

う。

『法蓮抄』に「今の法華經の文字は皆生身の仏なり」とあるが、その文字を「盲目の者は之を見ず。肉眼は黒色と見る。二乗は虚空と見、菩薩は種種の色と見」、そして「仏種純熟せる人（のみ）は（法華經を）仏と見奉る」のである（定遺九五〇頁）。この文章によると、「仏種」が個の内面に、仏陀の救済を明確に確かめるといふはたらきを裏づけるものであることが、よく理解できよう。

三 久遠釈尊の認識との照応

以上のことから推測されることは、「仏種の一念三千」を明らかにすることは、久遠実成の釈尊を顕らかにすることと関接しなければならぬということである。つまり、法の深化とその衆生への内在化と、そして仏陀の眞実身の顕現とは、いつも連関していなければならないのである。

『開目抄』は序分・正宗分・流通分の三段に分段して理解される。今、茂田井教亨教授の科段^③によつて、一念三千の問題を考察すると、まず序分の第一章に儒外内三道論を展開して、精神文化のなかでの仏教の位置づけを試み、仏教を論ずるなかで「但法華經計り教主釈尊の正言也」とし、「一念三千の法門は法華經の本門寿量品の文の底にしづめたり」（定遺五三九頁）と結論をかかげる（第二章法華の大事一念三千）。

日蓮聖人の仏種論について（渡 辺）

次いでその結論によつて第三章に諸宗の邪見を論じ、本論に入る。本論では、まず第一章二乗作仏論、第二章久遠実成論を展開する。これらは学者が等しく認める法華經の特色だからである。そこで、二乗作仏論は大乗において成仏を否定された二乗（声聞・縁覚）の成仏の可能を明らかにし、具体的にそれぞれに訖別を与え、これこれの時、これこれの国において、これこれの仏名を顕らかにして衆生を教化することを述べる。その過程で、二乗成仏を否認する華嚴經等を挙げて論を展開するが、そのなかで（如来種）（仏種）（二乗焼種）が論じられる。

維摩經に広く、維摩詰、又、文殊師利に問ふ。何等か如来の種と爲す。答て曰く、一切塵勞の隣（ともがら）は如来の種と爲る。

五無間を以て具すと雖も、猶能く此の大道意を發す等云云。（原文）……………

文の意は貧・瞋・癡等の三毒は仏の種となるべし。殺父等の五逆罪は仏種となるべし。高原の陸土には青蓮華生（ス）べし。二乗は仏になるべからず。いう心は二乗の諸善と凡夫の悪と相對するに、凡夫の悪は仏になるとも二乗の善は仏にならじとなり。諸（一）小乘經には悪をいましめ善をほむ。此經には二乗の善をそしり凡夫の悪をほめたり。（五四四—五頁）

以下、「方等陀羅尼經」の「焦種生牙不」によつて、「い（焦）れる種を（生）いず、二乗またかくのごとし。仏種（ヲ）

い（権）れり」（五四五頁）等と論ずる。

第二章に久遠実成を論じ、そのなかで前掲の「本因本果の法門」である「一念三千」が語られるのである（定遺五五二頁）。その段でも迹門によつて一往、一念三千が明らかにされ、久遠実成が顕らかにされることによつて一念三千の全容が明示されると述べられるように、迹門と本門とは深く密接に関わつていたのである。このことは、第三章知教の自覚と知罪の自覚、第四章法華経の色読、第五章諸天不守護の疑問というように、一旦、法華経の内容への参究から転じて、日蓮聖人の法華経弘通の実践の問題を論じた後、再び法華経に帰り、第六章迹門の一念三千（密示題目）、第七章本門の一念三千（密示本尊）が論じられる。第六章のなかで迹門の一念三千の出扱が論じられ（五三九頁）、南無妙法蓮華経の受持具足論が展開される（五七〇頁）。そうして、第七章において、教主釈尊の久遠実成の世界が前述にひきつづいて述べられるのである。このように、迹門と本門との論述は互いにからみ合いながら展開される。つまり、一念三千がある面では仏性論として語られながら、また次第に救済へと展開されながら、実はそれらは教主釈尊の法華経の世界からの照射として語られているのである。

しかも、『観心本尊抄』にこのような法華経の本門寿量品の救済の世界を明らかにして、「本門を以て之を論ずれば、

一向に末法の初を以て正機と為す」（七一五頁、原漢文）と末法為正を明らかにされる。そして、過去久遠の下種については、同様の用語であるにもかかわらず、一定の限定をもつたものとして末法為正の題目の五字の救済とは明確に一線を画する。その点については、『観心本尊抄』（七一五・七一六頁）等にくり返し述べ、また『守護国家論』（二二二頁）等にも同様の趣旨が述べられている。つまり「久遠下種の輩」は過去久遠に下種を受け、幾多の教化の経過の後に、本門に入つて等妙の覚に入つたものであるとする。日蓮聖人が死身弘法された目標は末代凡愚の救済にある。末代凡愚は久遠下種の輩と異つて、今この末法において教主釈尊より下種されるのでなければならぬ。したがつて、教主釈尊の救済を受けて、絶対信によつて下種が確認されることが最大の要点でなければならぬ。結局、日蓮聖人の下種論においては、くり返し述べられるように、信・不信ということが最大の要点なのである。このような信に関わつて仏種が論じられるところに、日蓮聖人の仏種論の独特な構造がある。これらの点については稿を改めたい。なお、信を仏種とするという点、『一乗要決』等の関わりについても別稿を期したい。

むすび

以上、主として一念三千と仏種との関連に焦点をあてて、

若干の考察を試みたが、要するに

- (1) 日蓮聖人が一念三千を重視するのは、「仏種」として重視するからであること。
 - (2) その根底に、末法の謗法の機を救うということを目目として、種熟脱三益論の転換のあること。
 - (3) なおかつ、その前提として、敵対的相即の論理としての「相對種」の概念がそれらの下敷きにあるであろうこと。
 - (4) 仏陀論と仏種論とは照応するものであること。
- 等を提示して、粗雑な報告のしめくりとする。

- 1 定遺は「昭和定本日蓮聖人遺文」をさす。
 - 2 「日蓮聖人の仏性論の基盤」(印仏研28—2)
 - 3 分段は、茂田井教亨『開目抄讃讃』による。分段Ⅱ科段は江戸中期の安国日講『録内啓蒙』等にくわしく設定され、その後、諸師によつてその改訂が試みられている。
 - 4 この点については、茂田井教亨『観心本尊抄研究序説』三六頁他、及び庵谷行亨『日蓮聖人の具足論』(印仏研25—2)等にくわしい。
 - 5 拙稿、2参照。
- (文部省科学研究助成費、昭和五十四年度、総合研究Aによる研究成果の一部)

(立正大学教授)

日蓮聖人の仏種論について(渡 辺)

寄稿されなかった諸氏の発表題目(一)

Yāmana の Saṃvīśiddhī 研究 石飛貞典(駒沢大北海道)
Abhinavagupta のキーター註の特徴 佐藤道郎(岩手大)
ヒンディー語文献の本文批評について—トウルスィーダースの「ラーム・チャリット・マーナス」を例として— 坂田貞二(拓殖大) パンジャーブ語の「Tone」 溝上富夫(大阪外語大) グリト文学(一) 石田英明(東京外語大) ミルザー・ルスワーとウルドゥー小説 都筑正夫(東京外語大修了) 詩人アクタル・シェラーニーについて 片岡弘次(大阪外語大) イラーチャンドラジョーシーとクマールオン田中敏雄(東京外語大) オーロピンドのタミル理解 小林圓照(花園大) プラーナ聖典にみられる修行者について 小山典勇(智山教化研) Śrauta 祭式研究(一)—phalakarana 永ノ尾信悟(九州東海大) Brīhaddevatā の śākhā について 徳永宗雄(Harv.大修了) Kāvya 作品に見られる人間について 野部了衆(聖徳女子短大) Vyākhaṇanāti 第一五章 土橋恭秀(東海大) ヨーガ哲学における「苦」の問題 樫尾慈覚(大阪大) Saṃkhyā 派知覚論に関する一考察 中井本秀(東北大学院) サーンキヤ三元論とヴェーダ的背景 今西順吉(北海道大) 有神論サーンキヤ 村上真完(東北大) 因果関係の決定をめぐる 神子上恵生(龍谷大) 選択集と観経疏 高橋弘次(仏教大)